

京大病院 リスクマネージャーのみなさま、こんにちは。

医療安全管理室では、そのときの社会のタイムリーな話題を紹介しながら、リスクや安全に関する用語をご紹介します。

今回は、オミクロン株の報道から、「ジャスト・カルチャー（正義の文化）」という用語を学びます。

項目：

1. オミクロン株と入国制限
2. ジャスト・カルチャー（正義の文化）

1. オミクロン株と入国制限

新型コロナウイルスの変異株「オミクロン株」をめぐる状況から、医療機関でのネガティブな情報に関する発信を考えてみたいと思います。
英国国营放送（BBC News, 2021/11/30）は、「南アフリカが、新しい変異株「オミクロン株」の検出を公表したことによって責められている」という状況に懸念を示しています。

まず、背景情報を。

南アフリカでは、人口の 24%しかワクチンの接種をうけていません。ワクチンの配分は、高所得国とそれ以外の国の間で格差があります。アフリカ大陸のワクチン接種率は低く、人々は新型コロナウイルスの脅威にさらされています。日本での接種率は 77.5%ですが、アフリカでは接種率が 1%の国が多いのが現実です。例えば、コンゴ共和国では 0.1%です。（Our World in Data アクセス日 12 月 4 日）。

このような背景状況があり、感染リスクに対して脆弱な環境にあることを頭の中に入れておく必要があると思います。その中で、感染の状況から疑問を抱いた専門家が解析し、新しい変異株であることを疑い、公表したという経緯があります。適切な対応をして、公表した結果、責めを負うという状況は、医療事故発生時に、それをオープンにして、説明した際に非難される文化と通じるものを感じます。

非難の文化によって心を痛めると、人々は隠すほうが得策だと考え、事故があっても報告しないようになります。

2. ジャスト・カルチャー（正義の文化）

「医療事故」という言葉が、2000 年頃からよく報道され、耳にすることが多くなりました。今から 20 年前に、世界中で、医療の安全に対する考えが、大きく変わりました。米国でも医療によって患者に害が発生しているという事実が大きく報道され、「To Err is Human（人は誰でも間違える）」という書籍が発行されました（1999 年）。

医療事故発生時に、患者・家族への状況説明や質問への対応など一連のコミュニケーションは、「オープンディスクロージャー（情報開示）」と呼ばれています。医療事故調査には、病院の仕組みを安全にする目的だけではなく、患者・家族に説明責任を果たし、信頼関係を再構築するという役割があります。

ヒューマンエラーの研究者のジェームズ・リーズンは、安全文化の構築には 4 つの文化が必要であるとし、そのひとつが、ジャスト・カルチャーです。エラーが発生したら説明責任を果たし、規律違反があれば放置せずに対応する、というものです。結果に問題なかったとして、違反を放置し、事故になったときだけ、違反者を非難することは、公正な文化とはいえないという考えです。一方で、注意深い人であっても、うっかりと間違えることはあります。意図的な違反とうっかりとしたエラーへの対応は区別しましょう、というのがジャスト・カルチャーです。

京大病院では、外部委員に参加していただく医療事故調査を年に 3 件程度実施しています。**説明責任を果たしながらも、報告したスタッフや事故調査を実施した本院が責められるようなことがない文化（ジャスト・カルチャー）を浸透させたいと思っています。**

*** 今回は、「ジャスト・カルチャー（正義の文化）」について、お伝えしました ***

